

27F-am08

セレギリン、ラサギリン類のシグナル検出による副作用比較

○冷 傲¹, 田 雨時¹, 浅野 遥香², 浅野 弘斗¹, 周 怡¹, 高木 達也¹ (¹阪大院薬, ²阪大薬)

【背景・目的】人口高齢化に伴い、神経変性疾患であるパーキンソン病の罹患者数は年々増加している。抗パーキンソン病薬としてはモノアミンオキシダーゼ B (MAO-B) 阻害薬が広く利用されている。本邦では、現時点ではセレギリンしか市販されていないが、海外ではL-アンフェタミン等に代謝されない治療薬のラサギリンも承認されている。同作用機序を有するこれらの 2 剤は有害事象誘発の観点でまだ十分に議論されていない。本研究は、FAERS データベースの情報を利用して、代表的なシグナル検出法 (ROR 法) を用いて、セレギリンとラサギリンの有害事象シグナルを比較、薬剤間の安全性プロファイルの差異を検討した。

【方法】本研究は、医薬品有害事象システムである CzeekV pro を用いて当該 2 剤の有害事象シグナルを 1997 年から 2017 年 2 期までの FAERS データベース登録情報より ROR 法で検出・比較した。この際、ROR の信頼区間の下限値は 1 より大きく、報告例数は 3 より多い場合のみをシグナルと定義した。

【結果】セレギリンとラサギリンのシグナル検出数はそれぞれ 60 と 134 であり、ラサギリンはセレギリンの 2 倍程度となった。オンオフ現象、ドーパミン調節障害症候群、性欲過剰、強迫性購買等の共通であるシグナルが計 44 件あり、体幹前屈症、レム睡眠異常などのセレギリン特有のシグナルが 16 件、チラミン反応、強迫性パーソナリティ障害、窃盗癖等のラサギリン特有のシグナルが 90 件であった。

【考察】セレギリンとラサギリンの共通のシグナルが多く、各薬剤の特有のシグナルも存在するものの、安全性プロファイルに関しては大きな差が確認できなかった。セレギリンの方に、アンフェタミン様代謝物特有の有害事象は、明白には見当たらなかった。両者の比較について、当日、より詳しく論述する予定である。